

2. スポーツ医学の社会貢献 ～スポーツ医学教育の視点から

小川宗宏^{*1}, 田中康仁^{*1,2}

●はじめに

スポーツ医学は、スポーツ活動に伴う外傷・障害を対象とする確立された医療分野であり、世界的に多くの研究が進められている。日本においても、スポーツ関連学会の設立やスポーツドクター・アスレティックトレーナー制度の構築が進み、一般のスポーツ愛好家からトップアスリートまで幅広くサポートされている。しかし、スポーツ医学教育の体制構築には課題が多く、社会貢献のためには人材育成と体系的な医学教育の確立が不可欠である。本稿では、日本におけるスポーツ医学教育の現状と課題について、我々が取り組む大学での医学教育を中心に概説する。

●スポーツ医学教育の目標

スポーツ医学教育の目的は、医学生や若手医師がスポーツ医学の概念や多様性を理解し、実践に必要な知識と技術を習得することである。スポーツ外傷や障害の治療、アンチ・ドーピング対策、予防医学、リハビリテーション、健康管理など、多岐にわたる分野の知識が求められる。特に、スポーツ現場では緊急事態に迅速かつ適切に対応する能力が不可欠である。そのため、指導医の適切な指導のもと、実践的な教育を提供することが重要である。

●奈良県立医科大学におけるスポーツ医学教育の現状

奈良県立医科大学では、2013年にスポーツ医学講座(寄付講座)を開設し、スポーツ障害の予防・早期発見および指導者への知識普及を目的に、スポーツ検診やセミナーを実施している。超音波検査を活用した野球肘やオスグッド・シュラッター病の検診、アスレティックトレーナーとの連携による障害予防、競技パフォーマンスの向上支援を行っている。また、県内のプロチームやスポーツイベント(サッカー、バスケットボール、奈良マラソンなど)への医療支援も実施している。このようなスポーツ現場での医療支援活動の実体験はスポーツ医学に興味のある学生が、スポーツ医学を志す入り口として貴重な経験となりうるため、奈良医大のカリキュラムに適宜組み込んでいる。

●各学年のスポーツ医学教育

医学科1年生：医学全般を俯瞰し、広い視野で物事を考える力を養うことを目的に、「医学入門(スポーツ医学)」の講義を不定期に実施。スポーツ医学の基礎概念やスポーツドクターの役割を学ぶ。

医学科2年生：国内外の大学や研究機関での研究に参加し、研究マインドを育てることを目的に、スポーツ医学に関心のある学生を対象に、約10週間のリサーチクラークシップを実施。

医学科3年生：全医学部生を対象にスポーツ医学の基礎を系統講義で学ぶ。

医学科4年生：ポリクリ期間中にスポーツ医学講義を実施。

医学科5・6年生：関心のある学生を対象に、ス

^{*1} 奈良県立医科大学スポーツ医学講座

^{*2} 奈良県立医科大学整形外科

Corresponding author：小川宗宏 (mogawa@naramed-u.ac.jp)



図1 スポーツイベントを想定した救護活動訓練

スポーツ医学の臨床やスポーツ現場での医療支援活動への参加などの実体験を4～8週間のポリクリ期間中に実施。

●スポーツ現場における医学教育

スポーツドクターの重要な役割の一つは、救急処置の要否を迅速に判断することである。そのため、学生時代からスポーツ現場やスポーツイベントを想定した救護活動訓練への参加は、スポーツ現場での救急対応能力を養うために非常に有用な経験となる。訓練内容には、AEDを用いた一次救命処置(BLS)、頸髄損傷患者の固定・搬送、脳震盪・熱中症・肩関節脱臼・骨折の応急処置など実践的な内容が含まれる(図1)。さらに、スポーツ障害予防検診の現場経験は、障害予防やコンディショニング管理、栄養指導など包括的なケアに対する理解や多職種連携の重要性を学ぶ貴重な機会となる(図2)。

●舞台医学

スポーツ医学がスポーツ活動に伴う障害・外傷を対象とするのに対し、舞台医学はバレエなどの舞台表現に伴う身体障害を対象とする。この分野

の発展には、社会的認知の向上、医療支援体制の充実、スポーツ医学の知見を活用した包括的サポートが不可欠である¹⁾。奈良医大では、舞台医学に関心を持つ学生のために、スポーツ医学との類似点を活かし、舞台公演現場での医療支援活動を医学教育に応用している²⁾(図3)。なお、本活動には日本臨床スポーツ医学会の研修マッチングプログラムを活用し、舞台医学の現場における医療支援活動に参加してもらった実績もある²⁾。

●スポーツ医学教育の課題

スポーツ医学は学際的であり、体系的な教育の確立が難しく、現行の医学部カリキュラムでは、主に整形外科や救急医学の一部として扱われることが多く、十分な教育プログラムが整備されていないのが現状である。その主要因として、医学教育全体のカリキュラムの過密さが挙げられる。医学部では幅広い知識を修得する必要があるため、スポーツ医学を独立した科目として十分に扱う余裕を確保することが難しい(図4)。また、日本にはスポーツ医学の統一カリキュラムが存在せず、各大学や研修機関によって教育内容にばらつきがある。そのため、医療従事者の知識や技術



図2 スポーツ障害予防検診



図3 舞台公演現場での医療支援活動

の習得に差が生じている。さらに、スポーツ現場での実践的な経験を積む機会が限られていることも課題の一つである。これらの課題を克服するには、選択科目や実習プログラムにスポーツ医学関連の内容を取り入れることで、医学生がスポーツ医学に触れる機会を増やすことが求められる。今後、スポーツ医学教育の重要性がより広く認識さ

れ、医学教育の中で適切に位置づけられることが期待される。

●さいごに

現場での医療支援活動は、スポーツ医学の知識を深めるだけでなく、アスリートの生活環境を理解し、多職種連携の重要性を学ぶ機会となる。ス

2. スポーツ医学の社会貢献～スポーツ医学教育の視点から

奈良県立医科大学 カリキュラム図

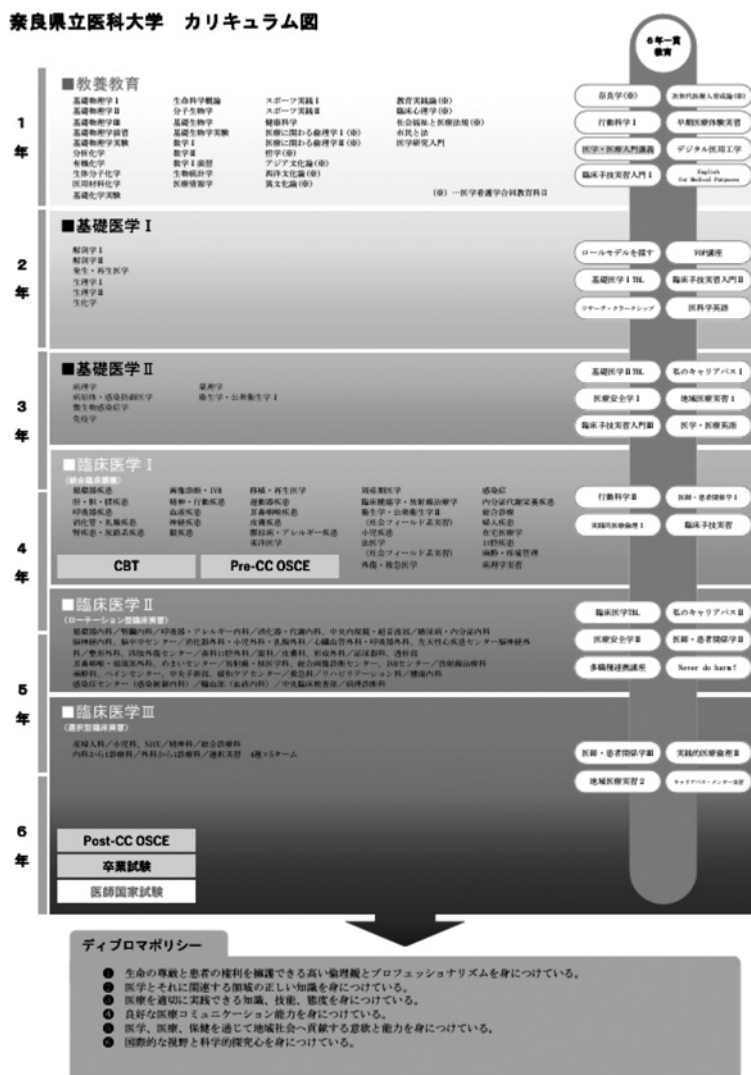


図4 奈良県立医科大学における医学教育カリキュラム

スポーツ医学を志す医学生がこの分野で活躍できるよう、教育体制の充実と実践的経験の提供を進め、スポーツ医学教育の発展を通じて社会に貢献していきたい。

文 献

- 1) 武藤芳照, 金子えり子, 福島美穂, 我が国における

「舞台医学」の現状と課題. In: 山下敏彦, 田中康仁, 山本謙吾 (編). 武藤芳照 (監修). 舞台医学入門. 東京: 新興医学出版社; 12-17, 2018.

- 2) 小川宗宏, 川崎佐智子, 田中康仁. 舞台公演への医療支援の実践. In: 武藤芳照, 山下敏彦, 田中康仁, 山本謙吾 (編). 日本舞台医学会 (監修). 舞台医学実践入門. 東京: 新興医学出版社; 100-104. 2025.